

# 育児語（ベビートーク）のくりかえし発話

友 定 賢 治

## 一 問題の所在

大人が幼児に向かって話す育児語（ベビートーク）の特徴については、既に多くの報告がある。村田孝次（一九八一）では、以下の6点をあげている。

- ①おとなにさし向けられる発話よりも、はるかに単純である。
- ②おとなにさし向けられる発話よりも、はるかに文法になつてゐる。
- ③高度に冗長な形式をとる。
- ④語・句や文を反復し、先行のベビートーク（BT）をパラフレーズする。
- ⑤限定された文型を頻繁に、かつ反復利用する。
- ⑥子ども自身の言語水準によく適合している。これは子どもからフィードバックされる情報による調整の

結果と思われる。

④に「語・句や文を反復し、先行のベビートーク（BT）をパラフレーズする。」とあり、確かにその例をあげることはたやすい。

食事をしている祖父の肩に上つてゐる幼児を見て、祖母が次のように言つてゐる。

○チヨット ゴハン タベル ナキヤー シエンノ。  
ナー。オジーチャン ゴハン タビヨール ナキヤー  
シエンノ。ゴハン タビヨール トキ スリヤー  
ナー。ハシガ タツケー。アブニヤー アブニヤー  
カラ。（ちよつとご飯を食べる間はしないの。ねえ。おじ  
いちゃんのご飯を食べる間はないの。ご飯を食べるとき  
にすればねえ。箸が《口の中に》ささるから。危ない危ない  
いから。祖母↓幼児 岡山県新見市坂本）

幼児がケーキを食べていて、口から落ちそうになるのを見て、  
○ホリヤ。オチラー オチラー。ソレガ。コレガ オチ

ラー。(ほら。落ちるよ落ちるよ。それが。これが落ちるよ。祖母↓幼児 岡山県新見市坂本)

と言っている。

この2例は、いずれも「ゴハン タベル ナキヤー シェン ノ」「アブニヤー」「オチラー」と同じ語句をくりかえしている。語句のくりかえしが、このような、同じ語句をくりかえす形式ばかりであれば問題にはできないが、次のような例があるのは見逃せない。

ケーキを食べている幼児を見て、次のように言っている。

○オイチーイ。オイチーカ。オイチーナー。(おいしい? おいしいか。おいしいなあ。祖父↓幼児 岡山県新見市坂本)

また肩に上がっている孫に降りるよう言うときに、次のような言い方が聞かれた。

○チョット オリトツター。ヨー オリル カナー。シンチャン チョット オリテミ。(ちょっと降りてて。降りられるかなあ。真ちゃんちよつと降りてなさい。祖父↓幼児 岡山県新見市坂本)

この2例は先の例とは異なり、同一語句のくりかえしという反復ではない。そして、この同一語句のくりかえしではないという場合、無規則にいろいろな言い方に変えられ、くりかえされるのだろうか。それとも、「オイチーイ ↓

オイチーカ ↓ オイチーナー」という3文の順序、

「オリトツター ↓ ヨー オリル カナー ↓ オリテミ」の順序は、何らかの規則に従っていると言えるのであろうか。従っているとすればどのような規則か、なぜそのような規則が必要なのか、ベビートークゆえの規則かといった点に本稿では焦点を当ててみようと思う。

つまり、「④語・句や文を反復し、先行のベビートーク(BT)をパラフレーズする。」というのは、

反復  
├── 同一語句・文を反復するもの  
└── 同一語句・文の反復ではないもの

と分けられるが、「同一語句・文の反復ではないもの」も、何らかの規則に基づいているのではないかと考えるのである。

なお、会話にあらわれるくりかえし発話については、中田智子氏に以下のような研究がある。

中田智子(一九九二)「会話にあらわれるくり返し発話の発生」  
中田智子(一九九二)「会話にあらわれるくり返し発話の発生」  
中田智子(一九九二)「会話の方策としてのくり返し」

(『国立国語研究所報告二〇四 研究報告集一二三』)

そのなかで、中田(一九九二)では、「くり返しとしての形状」として、以下の6種類をあげている。

○再現型(ほぼ同じ形でくり返す)

○一部変更型（多少の変更を加えてのくり返し）

○補足型（くり返す際に何かをつけ足す）

○言い換え型（意味を保持してことばを言い換える）

○要約型（内容をまとめた形でくり返す）

○対句類

さらに、くりかえしの機能・効果をつぎのようにまとめ  
ておられる。

会話への参加・寄与

共感

強調

情報伝達

談話構成

中田氏の研究では、くりかえし発話の機能を明らかにすることに中心があるように思われる。本稿では、中田氏が「再現型」とされたくりかえし発話以外のものが、どのような規則に基づいているのかを中心に、ベビートークを資料として考えようとするものである。

## 二 資料の説明

幼児に向かつての話し方も、同居しているかどうか、男の子か女の子かなど、さまざまな条件で異なっているだろう。本稿の分析資料は、以下のような条件をもつものである。

①同居はしておらず、およそ一カ月ぶりに帰省した日の夜

②幼児は4歳の男の子（Sと示す）と2歳の女の子（Yと示す）で、初孫となる

③夕食の場面

収録はテープレコーダーでおこない（いわゆる隠しどり）、後から文字化したものである。収録日時は、一九七九年四月二十九日で、父母以外の話者（記号で示す）は次のとおり。

H（曾祖母 八十四歳）

T（祖父 五十七歳）

N（祖母 五十六歳）

K（伯母《父親の妹》二十六歳）

## 三 同一語句・文のくりかえし

中田氏の「再現型」にあたるものであるが、これの中も一様ではなく、いくつかのパターンがあり、機能からみても分けて考えるべきものと思われる。

○ソロソロ タベナシヤ。ソロソロ。（そろそろ食べなさい。そろそろ。 N↓S）

○イーナ。イーナ。ユーチャン イーナ。

（良いねえ。良いねえ。優ちゃん良いねえ。 N↓Y）

○ヨクナル。ヨクナル。マツトツテ グラン。（良

くなる。良くなる。待つてごらん。 N↓S)

このように、文中の語句、あるいは一文全体をそのままくりかえすものがある。

○コレ | ヘンナ | タマボコー。(これ変なカマボコね。 Y)

→ ○ヘンナ | タマボコー。(変なカマボコね。 N↓Y)

幼児のことばをくりかえして(なぞって)いる。

○アブネー | トコダツタ。(危ないところだった。 S)

→

○アタマー | ウツテ | ナク | トコダツタ。(頭をうって泣くとこだった。 N↓S)

文末の部分を一にしてくりかえして(なぞって)いる。

文中の語句、あるいは一文全体をそのままくりかえすものは、その機能としては「強調」として説明可能であろうと考える。幼児に向かつて訴えたい焦点部分(上例では、「ソロソロ」「イーナー」「ヨクナル」)をくりかえして強調しているとみられよう。

幼児のことばをくりかえしている(なぞっている)例や、文末の部分を一にしてくりかえしている(なぞっている)例は、強調とは性格が異なるものである。「ヘンナ | タマボコー」とくりかえしているのは、幼児音(タマボコ)のおもしろさからくりかえした(なぞった)ものと言えよう。また「アタマー | ウツテ | ナク | トコダツタ」の例は、共

感するというのが適当と思われる。その際、当方言の言い方ではない「ダツタ」をくりかえした(なぞった)のではないか。

#### 四 同一語句・文のくりかえしでないもの

四一 共感のくりかえし

先に、ケーキを食べている幼児を見て、次のように言っている例をあげた。

○オイチーイ。オイチー | カ。オイチー | ナー。(おいしい? おいしいか。おいしいなあ。祖父↓幼児 岡

山県新見市坂本)

これの「オイチーイ。オイチー | カ。」という最初の2文は形式は異なるが、「問いかけ」という意味では一致する。次の「オイチー | ナー。」は、共感ともされようか。この場合、幼児が「オイチーイ。オイチー | カ。」という問いかけ文に何かの応答をしているわけではないし、2文に続けてすぐに、「オイチー | ナー。」という発話がなされているのであるが、祖父がケーキを口にしていないわけではない。資料からは、この逆の順、この例を使って言い直せば、「オイチー | ナー。オイチー | カ。」といった順で発話されているものは見あたらない。つまり、「問いかけ↓共感」という順は、規則にのつった順番ではないかと考え

るのである。同様の例をあげておこう。みそ汁を飲んで  
いるSに向かつて、

○アチーイ。アチー。カナ。アチー。ナ。 (熱い?)  
熱いかなあ。熱いなあ。 N↓S)

と言っている。まったく同様の順である。

これらを、「問い↓答え」と考えればそれまでのことか  
もしれないが、そうであるにせよ、「オイチー ナー・ア  
チー ナー」といった幼児とともに感覚を共有するという  
発話でくりかえしの発話が終わることに注目したのであ  
る。

次に、このようなくりかえしの発話がある。

○メツ ヨー。ユーチャン。モー イーカラ。モー ヤ  
メンシヤ。モ ヤメ ヨー。ナツ。(駄目だよ。優ちゃ  
ん。もういいから。もうやめなさい。もうやめよう。ねっ。  
N↓Y)

「モー ヤメンシヤ」と、一方向的な命令が最初にあり、  
ついで「モ ヤメ ヨー」と、相手を誘う言い方になつて  
いる。同じ例をもうひとつあげておこう。

○デルンジャロー。ハヨー イキナシヤ。イコー イ  
コー。(おしっこが)出るんでしょ。早く《トイレに》  
行きなさい。行こう、行こう。 N↓Y)

Nと一緒に言っているわけではない。このように声をかけ  
ているだけである。

○ママサンガ キツテ クレルケー。マツン デ。ミユ  
ロー デ。(ママさんが《ケーキを》切ってくれるから。  
待つよ。見とこうよ。 H↓Y)

これは「マツ↓ミル」であるので、くりかえし発話とはし  
にくい。命令から誘いという構造は同じものである。

この「誘い」も、幼児とともに行動するという形と受け  
止められようから、先にあげた「問いかけ↓共感」と同一  
の性格を有するもののできるのではあるまいか。

次のような発話にも注目したい。カバンを出してもらい、  
肩にかけているYをみて、

○ワー。インジャ ナー。イー ナー。(わあ。いいのだ  
ねえ。いいねえ。 N↓Y)

と言っている。最初の文はいいカバンだという評価(説明)  
の文であり、後の文は共感しようとしているものである。こ  
この評価(説明)も、自分の立場からの発話であり、次の  
文で幼児と共感するという構造である。

○ハイ。ユーチャン モー オワリ。ハイ。オニーチャ  
ンモ オワリ。オワリ デ。モー オワリ ヨ。(は  
い。優ちゃん、もう終わり。はい。お兄ちゃんも終わり。  
終わりなのよ。終わりよ。 N↓Y・S)

「オワリ↓オワリデ↓オワリヨ」の順である。最初の文  
は終わりという事実だけを言うもので、文末詞「デ」がつ  
いて幼児に一方的に告知する文となり、最後の「ヨ」の文

は幼児に呼びかけて、納得させようとしている。

このように、まずは一方的に大人の側から問いかけたり命令する発話があつて、次に幼児のほうに身を寄せて、共感したり、誘う形があるというのを、まず一つの規則性として考えてみる。

#### 四―二 強調のくりかえし

上記の「共感のくりかえし」と矛盾するようになるが、次のようなくりかえし発話も注目できよう。

○ユーチャン　ゴホン　ヨモ。サツ　ヨモ。カナ。  
(優ちゃん、ご本を読もう。さつ、読もうかなあ。N↓Y)

最初の文は誘いであるが、後の文は、自分がその行動をしようと相手に告げる文であり、その誘いを強調すると受けとることも可能であると思われる。

ここで、同一語句ではないくりかえし発話にも強調になるものがあると分かる。次のような例がそれである。

○ユーチャン。　チュミキ　イレニヤ。　チュミキ　イレテ。　コノ　ナカ　イレナサイ。(優ちゃん。積み木を入れなさい。積み木を入れて。この中に入れなさい。母親↓Y)

「イレニヤ↓イレテ↓イレナサイ」は、命令の意味合いがより明確に強調される順番になつていていると思われる。

○ゴハン　タベニヤ。　タベナサイ。　シンチャン。(ご

飯を食べないと。食べなさい。真ちゃん。T↓S)  
これも同じである。

○チョット　オリトツテ。　ヨ。　オリル　カナ。　シンチャン。　チョット　オリテミ。(ちよつと降りて。降りられるかなあ。真ちゃん。ちよつと降りてごらん。T↓S)

Sが肩に上がっているので食事ができないTが言っている。「T止め↓問いかけ↓ミヨ」という順で、問いかけを挟むものの、「T止め↓ミヨ」は強調の構造をもつと言える。

○フー　スルンジャロ。　フー　シエニヤ　イケンジャロ。(《ロウソクを》ふつとするんだろ。しなけりやいけ  
ないだろ。T↓S)

「スル」を「シエニヤ　イケン」と言い直すことで強調となつている。

○ゴハン　タベニヤ。　ゴハンオ。(ご飯を食べないと。ご飯を。N↓S)

「ゴハンオ」と、先の文にはない助詞「を」を加えて格表示を明確にすることで、ご飯を強調すると見てよからう。

○デキンカッター。　ネガ　デキンカッター。(できなかつた。「ね」《という字が》できなかつた。N↓S)

「ね」という字が書けなかつたことを言っているが、後の文ではそれをはっきりと示している。

対立するとも見える四―一と四―二をどう考えるかで

あるが、本稿では十分な解答が用意できていない。事態（コトガラ）との関係や、表現意図との関係を詳細に見ていく必要がある。今後の課題としたい。ただ、次に取り上げる成人どうしの会話では、四―一にあたるものは見いだせない。これがペビートークのくりかえしにみる特徴であることは指摘してよからう。

## 五 大人同士の会話におけるくりかえし発話

ところで、大人同士の会話におけるくりかえし発話にも同様の性格がうかがえるであろうか。気心の知れた三人による会話を見てみる。資料は、

A 友定賢治（一九九二）「岡山県方言の研究（3）―新見市坂本方言の談話資料―」（自家版）

B 友定賢治（一九九三）「岡山県方言の研究（5）―新見市坂本方言における、同一話者三人による十二年後の談話資料―」（自家版）

を利用した。

まず、同一語句・文をくりかえすものは頻繁に見られるが、ここではその例を挙げておくだけにする。

○オー。ジャジャ。イヌルイヌル ユーテ インデ シ  
モータンジャケー。（うん。そうそう。帰る帰ると言っ  
て、帰ってしまったんだから。 老男↓老男）

○ア―。アツタ。アツタ。ヤマノ ウエー ナー。（あ  
あ。あつた。あつた。山の上になえ。 青女↓老男）

次に、同一語句・文でないもののくりかえしであるが、中田氏の整理以上の指摘は現在できないので、ペビートークとの比較でだけ述べることとする。先に、ペビートークで指摘した二つの規則性のうちでは、後者の、強調あるいは明確化にあたるものは見られる。

○ナント アンビンガ ナント ヨモギダンゴノ アン  
ビンガ デキンホド ズツト ウレテ シマウ ユー  
テ。（なんと、餡入り餅が、よもぎだんこの餡入り餅が、  
できないほどずつと売ってしまうと言つて。 老男↓老男）  
「ナント アンビンガ ナント ヨモギダンゴノ アンビ  
ンガ」と明確化してくりかえしている。

○ミンナノ キゲンガトレン ホド ウレル ユータ  
デ。ホンマニ ウレル ユータケー。（皆のきげんがと  
れないほど売れると言つたよ。本当に売れると言つたから。  
老男↓老男）

これは、売れるという事実を強調しているくりかえしであるう。

ペビートークにあつた、もう一つのくりかえし規則（四―一に該当するもの）はこの大人同士の会話資料からは拾いあげることができなかった。

## 六 まとめ

ペビートークのくりかえし発話の特徴としては、最初に指摘した規則性、すなわち、まず大人から幼児に向かつての一方的な命令や説明的発話があり、問いかけの発話なども加えながら、最後は、共感したり誘ったりという、幼児に身を寄せた言い方にするということである。

これはくりかえしの発話ではないが、冒頭にもあげた例文に、

○ホリヤ。オチラー。オチラー。ソレガ。コレガ。オチラー。(ほら。落ちるよ落ちるよ。それが。これが落ちるよ。祖母↓幼児 岡山県新見市坂本)

というのがあった。ケーキが口から落ちそうになるのを見て言っているのであるが、「ソレガ」と言った直後に、「コレガ」と言っている。手を差し出しながら言っているの「コレ」になったと考えられるが、幼児に身を寄せての言い方であることは認められるのではないか。くりかえし発話にかぎらず、ペビートークにおいて、この構造を有する発話があると思われる。

なぜ、この構造をもつ発話がペビートークにおいて必要とされたのかであるが、熊取谷哲夫(一九八八)が、ペビートークを資料としてではないものの、「聞き手の視点から『状況』を捉えることは、聞き手に対する感情移入が伴い、

共感度の高い視点から言語行動を行うことになり、聞き手の『肯定的カオ』(引用者注 自己を肯定的に評価してもらいたいという対人的欲望)をより尊重する言語行動になるのである」と述べているのが示唆的である。

つまり、幼児との一体感のもとで、より幼児の意思を尊重しようというふうに繰り返し返され、結果として丁寧な言語行動になるのが、育児語(ペビートーク)のくりかえし発話の特徴的な点として上げられるのである。村田孝次(一九八二)に「母親は子どもに対して話しかけるのではなく、子どもと話し合うのである」という指摘があり、幼児の言語水準に合わせて話すことを意味している文脈であるが、本稿で扱った内容についても該当するように思われる。

### 【引用・参考文献】

- 鈴木孝夫(一九七三)『ことばと文化』(岩波新書)  
牧野成一(一九八〇)『くりかえしの文法』(大修館)  
友定賢治(一九八〇)「幼児との対話における言語的配慮」  
『島大国文』第9号  
村田孝次(一九八二)『言語発達研究』(培風館)  
岡本夏木(一九八二)『子どもとことば』(岩波新書)  
熊取谷哲夫(一九八八)「発話行為理論と談話行動から見た日本語の『詫び』と『感謝』」

(『広島大学教育学部紀要』二一三十七)

中田智子(一九九二)「会話にあらわれるくり返し発話」



『日本語学』一〇一—一〇二

友定賢治（一九九一）「幼児との対話におけることばづかい—  
方言発話に注目して—」（『文教国文学』第二十七号）

中田智子（一九九二）「会話の方策としてのくり返し」（『国立  
国語研究所報告一〇四 研究報告集十三』）